

ORIENTAL STUDIES TRIPOS Part II

Japanese Studies

---

Friday 29 May 2009      13.30 – 16.30

---

**J.12 JAPANESE TEXTS, 1**

*Candidates should answer **both** questions in Section A and **one** question from Section B.*

*All passages are **unseen** texts.*

*Write your number **not** your name on the cover sheet of **each** Answer Book.*

**STATIONERY REQUIREMENTS**

*20 Page Answer Book x 1*

*Rough Work Pad*

**You may not start to read the questions  
printed on the subsequent pages of this  
question paper until instructed that you may  
do so by the Invigilator.**

## SECTION A

Candidates should answer BOTH questions:

1 Translate into English: [35 marks]

一九六〇年代の世界は、多くの点で戦後国際秩序の枠組だった米ソ冷戦が一つの帰結点に達し、同時にその枠組が崩れ始めた時期であった。

米ソの軍事的対決が依然国際関係の中心事項だったことは確かである。両国とも核武装を続け、米国の場合は一九六五年約三万二〇〇〇の核弾頭を持つに至る。米国にとってはこの年がピークで、その後やや減少するが、ソ連はまだその時点では米国の保有量の半分以下しか核弾頭を所有していなかったこともあって、さらにその増強に努め、一九七〇年にはその差をかなり縮めるのである（米国は約二万七〇〇〇、ソ連は一万八〇〇〇個）。一九六五年にソ連の国防予算ははじめて米国を上まわるが、両大国が世界の核兵器のほとんどを独占し、最大の軍事力を保有する事情に変わりはなかった。

ところが同時に、一九五〇年代と同じように、米ソ両国間に直接の戦争はなく、したがって何のために核武装を続けていかなければならないのか、という問題も一層の深刻性を帯びてくる。そして両国が一九六〇年代に達した一つの結論は、MAD（相互確定的破壊）、すなわちお互いに相手（のみならず地球全体）を破壊する力を持っているという事実そのものが、核戦争を不可能

question continues...

にするということであった。米ソがお互いに対して核兵器を使わないという暗黙の了解が生じるのである。そうであれば、相手の核攻撃に備えて防衛的核武装をする論理性もなくなる。一九六〇年代の米ソ関係の一つの面は、この点でも両者が理解に達するべく努力がなされることであった。

相互に核兵器を使わないことが、少なくとも一九六二年のキューバ事件（ソ連によるミサイルの配備と米国の最後通牒、そしてソ連核兵器の撤去）以後両国で事実上確認されると、次は核軍備の無制限な拡張を止め、さらに米ソ以外の国が核大国とならないようにしようとしたのも自然の成行きであったろう。前者は一九六三年の部分的核実験停止条約、後者は一九六八年の核兵器不拡散条約となって実現する。

2 Translate into English: [35 marks]

中国は今、地方政府へ反発した農民達による暴動が頻発する一方、都市部でも学者や弁護士を中心とした知識人によって共産党独裁体制の終了、民主化を求める機運が高まっている。中国共産党による恐怖支配を暴いた「ワイルド・スワン」「マオ」が世界的ベストセラーとなったユン・チアン氏は、今こそが「中国民主化」の好機だと指摘し、その第一歩となる提言をする。

\*

昨年の世界的な金融危機以降、中国では、地方農民反乱が起きるなど、国内は混乱状態が続いている。これまでの中国のように、経済発展を遂げている間は、沿岸部から内陸部へと、貧困層と呼ばれる人々にまで、お金が還元されていた。しかし、この金融危機により、資金の流れが停滞し、地方農民たちの生活は昔

に逆戻りしている。そればかりではない。反乱の火種は、北京五輪開催が決定したときから、都市への集中投資ばかりが増し、農村地域には目も向けられなかったことにも起因しているといえる。

昨年末に北京で行なわれた全国発展改革会議で、2009年の目標として、三農（農村、農業、農民）や小中学校校舎の改造、地方医療衛生サービスの充実、村や鎮の総合文化センター建設などを重点的に投資することを決めた。貧困市民は、メディアが叫ぶほど、どんどん貧困化しているわけではないが、大都市とのギャップは次第に拡がっていく一方といえる。

中国の歴史から見てみると、これは相対的な貧困状態ではない。私は、昨年12月、中国農村地に足を運んだ。全員が全員ではないが、彼らは機

question continues...

会があればテレビを見て、金融危機の現状をもよく理解しているようだった。金融危機が悪影響をもたらさなかったとはいえないが、中国政府は、景気対策で国内需要を増やそうと懸命に努力しているようだ。国内の景気をよくしてこそ、中国市民は、お腹を満たすことができ、国家を繁栄させることができるという口実なのだろう。だが、実際には、内需拡大を促進させることに

よって共産主義を維持させ、貧困層が暴動を起こして民主化要求につなげる動きを抑えるためであろう。

Jun Chang, "Chūgokujin yo! Tiananmen hiroba no Mōtakutō no shōzōga o hikiorose," *SAPIO* (29 Jan. 2009), p. 16.

(TURN OVER

## SECTION B

Candidates should answer ONE of the following two questions taken from unseen texts:

3 Translate into English: [30 marks]

勤めから帰ってポストをみると、夕刊といっしょに葉書が一枚はいつていた。由子の中学のときの恩師からで、娘と生まれてまもない孫をつれてつぎの日曜日にそちらを訪問したいという内容だった。

ぼくは玄関で葉書をさっと読んだあと、夕刊とともにポストにもどした。

由子が帰宅したとき、ぼくは風呂をすましていてキッチンでビールをのんでいた。彼女はいつものように、疲れ切った体を前のめりにすることによってなんとか歩くという感じでキッチンに入ってきた。腰まである髪はぼさついてところどころはねているし、勝ち気な彫りの深い顔には生気のない濃い影が貼りつき、足首の辺りでパンストが伝線している。父の不動産会社でのんびりしているぼくとちがって、外資系の投資会社で働く彼女は毎日が命がけなのだそうだ。彼女は手に夕刊と葉書をもっていたが、葉書はまだ読んでいないようだった。

今日当番のぼくがレトルトのボンゴレ・ロッソでスパゲティを作っていると、背後で由子が歓声をあげた。

「わおっ！ ねえ祐司、信じられる？ 美花が子供を産んだんですって！」

「美花って、康先生の娘さんの？ へえ、結婚してたんだな」

「なにいつてんのよ、去年の秋に招待状きたじゃないの。出張の予定が入っていたからお祝いだけ送ったでしょ」

「そうだったかなあ」

question continues...

由子はぼくを無視して電話を五本つづけてかけた。どれも中学の同級生で、スパゲティは完全に冷めてしまった。

ぼくがソファに横になってテレビを見ていると、風呂から上がった由子がバスタオルを体に巻きつけたまま、ぼくからは見えない椅子に坐り、爪を切り始めた。

「さっきニュースで、北朝鮮の日本人妻里帰りの映像が流れていたんだけど、出迎えるのなかに康先生に似た人がいたなあ」

ぼくはまったくの嘘をいった。

「ほんとにいい？ 先生みたいな顔の人はそんなにいないわよ。でももしかするとほんとは先生かもね。帰ってきた人のなかには、先生が手引きをして北に送った人もいるかもしれないから」

由子の年のはなれた姉が北朝鮮で暮らしていることを知ったのは、康先生に初めて会ったときだった。それは七年前のぼくたちの結婚式の日で、康先生は久しぶりに会う由子の手を取るなり、向こうのお姉さんは元気かといった。

恩師            favourite teacher  
 ばさつく        messed up, unruly  
 ボンゴレロッソ (It.) red clam sauce  
 祐司            ゆうじ (人名)  
 美花            みか (人名)

里帰り        visit home  
 康            かん (人名：上の恩師)  
 手引き        guidance

GEN GETSU, 'Oppai', in *Kage no sumika* (2003), p. 93-5.

(TURN OVER)

## 4 Translate into English: [30 marks]

〈他者〉に対するイメージ形成には新聞、雑誌、テレビ、小説、広告と、各種メディアの果たす役割なくしては語れないだろう。メディアの働きは多様性という横の広がりと同時に、歴史的な流れの縦軸からも見ていく必要がある。イメージとは昨日今日作られたものでなく、過去から継承され累積されてきた文化遺産でもあるからだ。例えば、文化人類学者シーラ・ジョンソンはアメリカの戦中・戦後ベストセラー本の中から対日観の流れを探り、歴史学者ジョン・W・ダワーは太平洋戦争中に日米が互いに抱いた〈他者〉イメージを言葉の表現からマンガ表現に至るまで幅広く検証した。また日本側でもアメリカのテレビ報道に見る日本のイメージや、教科書における日本描写の変遷など、さまざまなアプローチからの調査報告がある。そしてもうひとつ、アメリカのメディアとなれば、どうしても忘れられないのがハリウッド映画の存在だ。

今世紀初頭から始まったハリウッド映画は、二十世紀アメリカの大衆文化をリードしてきた。映画というメディアは「アメリカ人」という自己イメージをスクリーンに形成してきたと同時に、〈他者〉のイメージも繰り返し提示し続けてきた。それは〈自我〉と〈他者〉をどう認識するか、アメリカの世界観の現れにほかならなかった。そしてハリウッド映画の歴史を振り返って見れば、そこには日本を包括した広い意味での「アジア観」の流れをはつきりとたどることができる。太平洋の向こうに広がるアジアという〈他者〉をアメリカはどう捉え、どう理解してきたのか——ハリウッド映画はそれを語ってくれる。

question continues...

エドワード・W・サイードの言う「オリエンタリズム」とはヨーロッパが体内に長く培ってきた東洋観に基づく「理論および実践」であつたが、ハリウッド映画にも連綿としたオリエンタリズムの系譜がある。それは東洋に対する観念や想念の現れであると同時に、まさしく実践の舞台であつた。それにしても、サイレントの時代から今日に至るまで、銀幕には何と多くの東洋人が登場してきたことだろう。諜報活動にいそむ日本人外交官から、ドラゴン・レディー、中国人探偵チャーリー・チャン、日本人スパイのミスター・モト、戦争映画の中の日本軍人たち、あるいは魅惑のゲイシャ・ガール、不気味なヴェトナム兵の群れ、そしてエコノミック・アニマルのニッポン人……。スクリーンに登場した数々の東洋人の肖像は、そのままアメリカのアジア観の歴史とオーバーラップする。

縦軸	vertical axis	銀幕	'silver screen'
累積する	accumulate	諜報	spying
培う	cultivate	魅惑の	bewitching
実践	practice		

MURAKAMI YUMIKO, *Ierō Feisu* (1999), pp. 4-5.

END OF PAPER